



2025 年度

第 9 回高校生カンボジアスタディツアー 報告書

千葉県立千葉東高等学校 Riru K.

～導入～

私は元々「教育」に興味があり、カンボジアの教育はどのようなことが行われているのか、またどのような課題があるのかを実際に現地に行って知りたいと思い、カンボジアスタディツアーに参加しました。このツアーの中で、カンボジアの様々なことについて知ることができました。特に教育の面では、約 50 年前に波尔・ポト政権下で行われた大虐殺によって国家レベルで教育が崩壊し、その後大きく改善はしたものの、まだ課題点はたくさんあることがわかりました。

ニュースレターでは、教育のことを中心に多くの人に知ってほしいことをまとめました。

～波尔・ポト政権下での大虐殺と教育への影響～

カンボジアでは親米政権が倒れたのち、クメール・ルージュ政権が台頭した。旧政権下の人物、専門家、知識人、教育関係の人々、仏教僧侶、少数民族だけでなく、カンボジアの旧政権や外国とつながっているという疑いのみで逮捕して処刑したりもしていた。収容所に約 2 万人もの人が連行され、拷問を受けさせられた。S-21 などの収容所では一度連行され、拷問されれば二度と帰れないため、ここは「生きては出られぬ収容所」と呼ばれた。その後、カンボジアの特に教育面ではこの国家レベルの教育機関崩壊は今日でも様々な問題を引き起こしている。

ツアーでは実際にトゥールスレン博物館やキリングフィールドなどこの大虐殺に関連する施設に訪れた。事前学習の段階でこの大虐殺については知っていたが、現地でその生の現場を見たことでこの大虐殺の残酷さや悲惨さを知ることができた。この悲劇を二度と起こさないために UNESCO は処刑や拷問が行われた場所を有形遺産、記憶しておかなければ残らないトゥールスレン博物館やキリングフィールドなどに残された写真や資料などは記憶遺産という無形遺産として保護している。



トゥールスレン博物館
元々は高校だった場所で激しい拷問が行われていた。



キリングフィールド
慰霊の塔に続く道。ここでは小さい子どもを含む多くの人が虐殺された。

～教育面での課題と寺子屋が果たす役割～

ポル・ポト政権下で教育制度が崩壊したため、学校に行くことができない人も多く発生した。そのため、日本ユネスコ協会連盟では寺子屋をつくり、教育を受けられなかった人たちへのサポートをしている。

① カンボジアは女子よりも男子の方が教育を受けられないことが多い

カンボジアでは女子は主に家事などを行うため比較的に学校にも通いやすいが、男子は農作業や出稼ぎなどを行っているため女子に比べて学校に通いづらいという現状である。

UNESCO ではカンボジア政府と協力してジェンダーに配慮した教材への改訂を行っている。
日本ユネスコ協会連盟の寺子屋でもバイク修理の方法などの実生活に生かすことができるBEEP という講座が開講されている。

②教育機会に恵まれなかった子供と大人

小学校への入学率はとても高くなってきているが、貧困や家事・労働によって学校に通う時間がなかったり、進級テストに落ちてしまい進級できずにやめてしまったりなど様々な理由で中退する子どもは多い。中退率は女子で13.8%、男子では17%である。

今の大人たちはポル・ポト政権下の影響を多く受けた人が多い。ポル・ポト政権時代の非識字率は60%を超え、その後もほぼすべての学校で設備と人材が不足しており、満足に教育を受けることが難しかった。

寺子屋は時間に柔軟なプログラムを組んでおり、子どもたちが通いやすい環境が整備されている。公教育のカリキュラムを圧縮することで必要な内容を集中に学ぶことができるため、一度中退していてももう一度学ぶことができる。また進学支援プログラムや栄養教育も行われている。

主に読み書きができない大人を対象に、クメール語の基本的な読み書きの計算の学習機会が提供されている。学習内容は人々の生活に直結したテーマを扱い、貧しい農村に暮らす人々が、生活をよりよくする力を付けられるように配慮されている。

※寺子屋の課題

いまだに遠隔地に住む人々は内戦時代の地雷などの影響で通うことが困難となっている。またその状況に関しても正確な数は把握できてはいない。様々な講座やプログラムを行っている寺子屋でも長期的な財政支援が不可欠になっている。また、セカンドチャンスを獲得できてもやはり家庭の事情によって出席が不安定であったり、出稼ぎに行くために寺子屋をやめたりする人もいる。

～このツアーを通しての気持ちの変化～

僕は初めての海外で、特に発展途上国で正直はじめはあまり発展していないのだろうなあとかスリは大丈夫か、他にも料理は食べられるのかなどとても不安なことばかりだった。しかし実際に行ってみると、確かに地方も多いなあという印象だったが、プノンペンなどには高級ホテル、銀行、高層マンションやイオンがあり、カンボジアに到着した直後からとても驚かされた。言葉が通じるかも不安だった現地の人たちとも、とても優しく様々な場面で助けてもらったことで現地の方々のたくさんのぬくもりを感じた。この経験は自分の考えを変化させるきっかけになった。また、言葉が通じないからと壁を感じる必要がないということが分かった。もちろん危ない地域や発展していない地域もあるかもしれないし優しくない人もいるかもしれないけど、自分たちが持つ先入観だけがすべてじゃないと思った。そしてカンボジアについてたくさん学んでいく中で、日本で僕たちが当たり前のようにできていることが決して当たり前ではないということを知り様々なものへの感謝の気持ちを大切にしたいなと思った。本当の多くのことを知り、学び、考えることができた貴重なツアーだった。



寺子屋の子どもたちとの記念写真

～感想と事後活動で伝えていきたいこと～

このスタディーツアーで印象に残ったものの 1 つにお金を欲しいという物乞いに会ったことである。自分は何もできなかった。教育は確かに大事だけど命あってのことであり、本当に彼らにとって最も必要なのは教育なのか、それよりも大事なものがほかにあるのかということを考えるようになった。それは2、3か月たった今でも見つかっていないのでこれから見つけていきたいなあと思っている。このツアーでは普段は入れない日本大使館や UNESCO のプノンペン事務所などの多くの所に行けたし、事前学習では知らなかった事や知っていたことでも実際に行ってみることでその時とはまた違った感情を感じることができた。そして一緒に行った他のメンバーの中には、英語がとても流暢な人や日本より海外の方が長い人など自分の刺激になるような人が多かったことなど自分の中でものすごく貴重な経験になった。日本に帰国後、友達や先生に色々なことを聞かれた。その中でも発展途上国という言葉が比較的多く出ていたように感じた。しかし、実際に行ったことで先進国と発展途上国で分けたり、言語や肌で分けたりして考えてしまうことはとても良くないということを実際に感じる事ができた。具体的にどのような活動を行うかは決まっていはいないが、僕が学んだことや感じたこと、考えたことを 1 人でも多くの人に共有出来るような活動を行い、カンボジアの子どもたちの笑顔を守っていききたいと思う。



寺子屋の子どもたちとカンボジア風のハンカチ落としで遊んだ様子